

日中戦争と少女小説
—火野葦平「花の命」／『花のいのち』の書き変えをめぐって—
The Sino-Japanese War and Shōjo Novel:
Hino Ashihei's Rewriting of “Hana no Inochi”

小島 秋良
KOJIMA, Akira

摘要

Hino Ashihei gained great popularity as a writer serving in army during the Sino-Japanese War. He receives sustained attention as a soldier writer to date, and studies on his works have been mostly limited to his best-selling ‘soldier trilogy’ (heitai sanbusaku), which are *Wheat and Soldiers* (Mugi to Heitai), *Soil and Soldiers* (Tsuchi to Heitai), and *Flower and Soldiers* (Hana to Heitai). This paper discusses the representation of the Sino-Japanese War not in ‘soldier trilogy’ targeted for general readers, but in works written for young girls, focusing on the shōjo novel “Hana no Inochi” (December,1940 – August,1941), which was rewritten and published as *Hana no Inochi* (April,1949) after World War II. Following the Japan’s defeat, Hino was showered with severe criticism for his participation in war; he was purged from public office by the GHQ when rewriting the novel. Previous researches criticized Hino’s position as a writer for the reason that the postwar version of *Hana no Inochi* was a reiteration of his understanding of war which remained unchanged after the war. Nonetheless, by reviewing the historical backgrounds when each novel was published, this paper examines the issue of rewriting of *Hana no Inochi* and the reception of the novel.

Concerning the wartime version, this paper focuses on the wartime stance of the magazine *Shōjo no Tomo* on which “Hana no Inochi” was published, and explores the meaning of writing Sino-Japanese War-related works for young girl readers. As for the postwar version, this paper identifies ways of rewriting with regard to GHQ’s censorship, and further examines changes in story settings unassociated with the censorship.

This paper argues that the novel was accepted in Japan under the Cold War structure, and it indicates that the society’s understanding of China didn’t show drastic changes immediately after the war. The discussion of Hino’s postwar works considers the relationship between Hino and the Sino-Japanese War beyond the ‘soldier trilogy,’ and evaluates his role of recounting war experience to the generations to come.

キーワード：少女小説 日中戦争 火野葦平 書き変え 検閲

Keywords: Shōjo Novel, The Sino-Japanese War, Hino Ashihei, rewriting, censorship

1. はじめに

火野葦平は「糞尿譚」(『文学会議』第4冊、1937年11月)で第6回芥川賞を受賞し、1938年3月には兵隊として日中戦争に従軍するため訪れていた中国杭州で陣中授与式が行われる。現役の兵隊が芥川賞を受賞したことで、火野は一躍注目を集め、以後軍報道班員として活動する。特に日中戦争を舞台に書かれた「麦と兵隊」(『改造』1938年8月号)「土と兵隊」(『文芸春秋』1938年11月号)「花と兵隊」(『朝日新聞』夕刊1938年12月20日～1939年6月24日)の「兵隊三部作」は、大ベストセラーとなり今日においても日中戦争と文学を考える際、火野は欠かすことのできない人物となっている。

戦時中華々しい活躍をした一方で、敗戦後は戦争責任を巡って厳しい批判にさらされる。詳細は後述するが、1948年6月から1950年10月まで公職追放指定を受けるなど、敗戦は兵隊としても文学者としても火野に大きな影響を与える契機となった。本論では戦時中、日中戦争を題材に描かれた「花の命」(『少女の友』1940年12月号～1941年8月号、以後【戦中版】とする)と、敗戦後、公職追放指定期間中に書き変えを施して再出版された『花のいのち』(ポプラ社、1949年、以後【戦後版】とする)を取り上げ、これらの作品が読者である日本の少女に伝えようとする戦争のあり方を考察する。

敗戦を経て再出版された【戦後版】の「まえがき」には「忘れることのできぬ中国少女の物語を、日本の少女たちのまえにくりかえす」¹とあるが、【戦中版】と【戦後版】が発表された時期には約8年半もの隔たりがあり、両者を意識して読んでいた読者は多くはないだろう。

また出版数においても、両者には差がある。戦時中『少女の友』に連載された【戦中版】は、その後単行本化され『花の命』(実業之日本社、1942年)として刊行される。今回確認をすることができた国立国会図書館所蔵のものは、奥付に「昭和十七年十月二十日発行(一〇、〇〇〇部)」と書かれており、大阪国際児童文学館所蔵のものは「昭和十八年二月十日再版(五、〇〇〇部)」となっていたことから、少なくとも15,000部の流通があった。一方敗戦後に書かれた【戦後版】はGHQの検閲を受けており、その検閲資料によると出版数は3000部となっている²。【戦後版】が出版された当時は、紙が配給制であったことも影響しているが、その流通量は実に【戦中版】の5分の1だったのだ。

以上のようにこれらの作品には時間的隔たりと、出版数の差があり、「まえがき」の「日本の少女たちのまえにくりかえす」という言葉を、単に過去の出来事としての戦争記憶を物語として聞かせるという意味に捉えた少女たちが大半だったのではないだろうか。しかし作者である火野にとってこの中国の少女を描いた物語は、戦争を舞台とした小説の中でも忘れることのできぬ印象深いものであったのだろう。その理由の一つが、先に述べた火野の公職追放である。

公職追放は、連合国最高司令部の「覚書」に基づき、1946年2月28日勅令第109号「ポツダム宣言の受諾に伴い発する命令に関する件に基づく就職禁止、退官、退職等に関する件」及び、同勅令の施行命令である1946年閣令内務省令第1号を公布実施したことに始まる。はじめ

中央公職者を対象としていたが、のちに地方公職者やその他政界、経済界、文化界へと広がっていった。その中で「罷免及排除すべき種類」とされた者はA項からG項の7つに分けられ、文筆家はG項「その他の軍国主義者及極端なる国家主義者」に該当した³。実際にG項該当者の指定を受けた文筆家は亀井勝一郎や尾崎士郎ら331名にのぼる⁴。

しかし、以上のような該当者が直ちに追放を受けたわけではなく、解除を申し出る機会も与えられていた（1947年勅令第65号「1947年勅令第1号の規定による覚書該当者の指定の解除の祈願に関する勅令」）。火野が1948年4月に仮指定を受けた際、志賀直哉などが「火野はヒューマニストであること、戦争によって私利を貪ろうとしたわけではないこと、戦後の日本に欠くことのできない人物であることなど」を挙げ、追放の取り消しを求めた⁵。だが、同じく異議申し立てをしていた丹羽文雄や石川達三などが、戦時中発禁処分や執筆禁止を受けている点や、作品内容が必ずしも軍国主義を謳歌したものではないと判断された点で指定解除されたのに対し、火野の追放は決定した⁶。

文筆家の場合公職追放が意味することは、公職への就職禁止のほか政治上の意見や政治と関係する経済問題などについての執筆禁止でもあった。しかし、それらに関連のない小説や随筆などの執筆活動は可能であり⁷、火野が直ちに職を失うことはなかったが、「言論、著作若は行動に依り好戦的国家主義及侵略の活発なる主唱者たることを明にしたる一切の者」⁸として認定されたのである。

それにもかかわらず、火野は日中戦争を舞台とした作品、さらに言えば公職追放と関わりのある戦時中の経験に基づいて書いた作品に、書き変えを施してまで再び世に出そうとしたのだ。そこまでして書きたかったこの作品は、どのような内容であるのだろうか。

2. 【戦中版】「花のいのち」と【戦後版】『花の命』

【戦中版】【戦後版】の書き換えについては後述するが、両者の大まかなストーリーは共通しており、日本人兵隊の「私」が中国広東に駐在した時、交流した現地の中国人少女「李雪英」のことを日本にいる雪子という少女に手紙で伝えるという形式で進む。梗概は以下の通りである。

広東で起きた戦争の混乱の中、死にかけた雪英を日本軍が助け、恩義を感じた雪英は元気になると宣撫班で活躍する。赤い花を好み、楊琴をたくみに演奏する利発な少女雪英は、日本軍から「雪子」や「雪ちゃん」という名前と呼ばれるようになる。ある時雪英は生き別れた兄の「李東伊」と再会するが喜びも束の間、兄は便衣隊となり広東の街に火を放つ暴動計画を立てていることを知る。日本軍の情報を流すように言われる雪英だが、それをきっぱりと断り反対に兄に心を入れ替えるよう、また暴動計画を止めるよう命がけで説得を試みる。一度は計画中止になったように見えたが、後日火事騒ぎが起き雪英は街へ飛び出す。そこで兄を見つけるが、彼女は発狂し最後は銃弾があたり死んでしまう。

【戦中版】の先行研究では、宣撫班に入った中国人少女雪英が亡くなるという結末を描いて

いることに、帝国日本の思惑に回収されない「他者」すなわち、雪英の存在の重みを読み取った読者が少数であれ存在したのであれば、それは新たな「共生」となるのではないかと指摘している⁹。

また管見の限りこの作品の書き換え問題を指摘した唯一の先行研究では、「日本軍に協力して兄を裏切らねばならなかった中国人少女の生と死を、いわばひとつの鑑として小説のなかで称揚することにおいて、そして日本の戦争がそのような美しい心と共鳴しあうものだったことを示唆する点において、作者の戦中と戦後にはいささかの变化もない」¹⁰として、作者火野葦平の立場を批判している。

しかし先行研究では、侵略戦争をアジアのためと信じて疑わなかった【戦中版】と、敗戦国として占領下のもとで書かれた【戦後版】という作品を取り巻く環境の変化を踏まえてはいない。そのため単に作者の立場を批判するのみではなく、それぞれの作品がどのように受け入れられていったのか、そしてその受け入れた時代状況が抱える問題とは何であったのかということをも明らかにすることも、この作品の書き換えを考える上で重要なのではないだろうか。

本論では、まず【戦中版】の掲載誌である『少女の友』との関連から、【戦中版】が受け入れられていった時代状況を確認する。その上で【戦後版】に施された書き換えを取り上げ、占領下においてどのように出版が許可される小説となったのかという点を考察する。日中戦争を舞台とする【戦中版】／【戦後版】の書き換え問題を、当時の時代状況・歴史的背景のもと考察することで、中国をめぐる日本の言説のあり方の一つとして捉えることができるのではないだろうか。作品を受け入れていった社会のあり方にまで広げることで、作者の認識にとどまらない、作品の読みを試みる。

3. 【戦中版】「花の命」と雑誌『少女の友』

具体的な作品の書き換えを見ていく前に、【戦中版】がどのように読まれていたのか、まずは戦時中に書かれた作品の置かれていた状況を明らかにする。

【戦中版】が掲載された雑誌『少女の友』は、少女向け雑誌として『少女界』（金港堂書籍、1902年4月刊行）『少女世界』（博文堂、1906年9月刊行）に続き1908年2月に実業之日本社から刊行された。その名の通り、読者である少女たちにとって「お友だち」の存在となることを目指したものだ¹¹。『少女の友』の歴史の中でも、1931年6月号から1945年9月号までを担当した第5代主筆内山基は、読者から「基先生」「M先生」¹²と呼ばれて親しまれ、「読者を育み大きな影響を与えた名編集長」¹³であった。

また『少女の友』の代表画家となった中原淳一（1932年6月号～1940年6月号）をデビューさせたのも内山である。中原は「子供でもない、大人でもない、いかにも「小さな娘」だけの夢見る事、考える事、行動する事」を表現するような「少女だけの世界」を考え、創作する¹⁴。結果として、『少女の友』は主な読者層であった女学生たちから絶大な支持を得るものとなったのだ。

1930年代後半は同じく少女向けの雑誌『少女倶楽部』との熾烈な競争があったが、内山や中

原らが作り上げた『少女の友』の世界は『少女倶楽部』との違いを作ることに成功した。すなわち『少女倶楽部』が「大衆的な娯楽性、生真面目な教育性、堅実な素朴さ」を持つものであったのに対し、『少女の友』は「優雅な叙情性、機智に富んだ諧謔性、洗練された華麗さ」を特色とする少女雑誌となったのである¹⁵。以上のような理由から、内山・中原の活躍した時代は「女学生に熱烈に支持された黄金時代」と呼ばれている¹⁶。

『少女の友』が「黄金時代」を迎えていた一方、日本社会では1938年4月国家総動員法が公布されるなど、だんだんと戦時色が強まっていく時期であった。それに伴い児童向けの書物や読物も国から編集方法を指示されるようになる。

1938年10月、文学者や児童心理学研究家などの答申案を基に作成した児童読物への指示が出される。いわゆる「児童読物改善ニ関スル指示要綱」である。これは内務省警保局図書課から児童出版業者へ通達されたが、その際正式な表題は無かったようだ。本論では、鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ—15年戦争下の絵本』（ミネルヴァ書房、2002年）に収録されている「児童読物改善ニ関スル指示要綱」（以下「指示要綱」）の方針に則り、この表題を使用する。また「指示要綱」の引用は全て、ここで収録されたものによる。

「指示要綱」によると、活字の大きさの指定や振り仮名の使用制限、懸賞や広告、付録のあり方といった編集方法や、仮作物語や漫画の分量を減らし科学的知識や歴史的知識に関するものを増加させることといった、物語の内容に関することまで細かく指示された。特にここで注目したい点は、中国における事変記事の書き方には項目一つ分を割いていることである。

一、事変記事ノ扱ヒ方ハ、単ニ戦争美談ノミナラズ、例ヘバ、「支那の子供は如何なる遊びをするか」「支那の子供は如何なるおやつを喰べるか」等支那ノ子供ノ生活ニ関スルモノ又ハ支那ノ風物ニ関スルモノ等子供ノ関心ノ対象トナルベキモノヲ取上げ、子供ニ支那ニ関スル知識ヲ与、以テ、日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スルヤウ取り計ラフコト。従ツテ皇軍ノ勇猛果敢ナルコトヲ強調スルノ余リ支那兵ヲ非常識ニ戯画化シ、或ハ敵愾心ヲ唆ルノ余リ支那人ヲ侮蔑スル所謂「チャンコロ」等ニ類スル言葉ヲ使用スルコトハ一切排スルコト
(p.357)

以上のように中国について書く場合、それは敵対心や憎悪を煽るのではなく、興味を抱かせ児童にとって身近に感じさせるものとなることが求められた。背景には中国での戦いが中国民衆ひいてはアジアの人々のためのものであるという考えの「正しさ」を伝える思惑があったのだろう。戦後火野は「麦と兵隊」（『改造』1938年8月号）を書いた当時を振り返り、ペンに加えられていた制限として「戦っている敵は憎憎しくいやらしく書かねばならなかつた」¹⁷と述べているが、このような中国の書き方は、児童向けの読物では寧ろ忌避するよう求められていたのだ。

また「指示要綱」の項目の中には、「一、華美ナル消費面ノ偏重ヲ避ケ、生産面、文化ノ活躍面ヲ取入ルルコト」¹⁸というものもある。これは美しさや華やかさを追求する『少女の友』とは相反する要請であった。そのため『少女の友』もその編集方法を変えていかざるを得なくなる。

一例を挙げると1938年9月号より「宝塚日記」を除く全ての宝塚関係記事と口絵写真が消え、1939年2月号より本文の文字のルビ活字を全廃し、1940年頃より非時局的な読者のペンネーム

が消える¹⁹。そして1940年6月号をもって、『少女の友』を代表する専属挿絵画家中原淳一が降板する。中原の絵は少女たちにとっては憧れのものではあったが、軍部からは「国民に不健康な印象を与える、着ている着物が華美である」²⁰として目をつけられていたのだ。この中原降板を受け、内山の元には怒りと悲しみのハガキが送られ、『少女の友』は7000余りの読者を失ったという²¹。その後も1942年2月号から表紙に戦時標語が掲げられるようになる²²など、『少女の友』の特色であるロマンチックさやハイセンスさを持つ誌面は、戦時下において徐々に不可能となっていった。

先述したように、中原の絵は『少女の友』の世界観を作り出す象徴的なものであり、読者の少女たちにとってもその世界観が非常に特別なものではあったことが、中原の降板をめぐる動きに表れている。そして火野の「花の命」の連載は、中原の降板から6ヶ月後、まさに『少女の友』においても戦時色が強まり、ますます時局に沿う編集方針へと変化していく時期に行われた。

それでは『少女の友』が変化していく中で、【戦中版】はどのように受け止められていたのか。『少女の友』の読者投稿欄である「ともちゃんくらぶ」に掲載された読者の反応の一例を以下に挙げる。なお便宜上引用順に番号を振り、断りのない限り下線部は引用者によるものである。

①火野先生の「花の命」始めから胸がドキドキ致します。(東京 夕陽丘静子)(1941年2月号)

②花の命ステキ。火野先生の淡白な文好きです。さら／＼(ホントにさう思へます)読む内に美しい詩をきいているやうに思へます。先生は詩人小説家だと思ひました。(京都 木原理子)(1941年2月号)

③考査の最中に今月号を手にしました。あまり読みたいので花の命をよみ、戦場の経験がなければ出来ない文章だとつく／＼思ひました。(松江 忘れな草)(1941年3月号)

④花の命を読んであるうちに文の中に、引入れられてしまひました。雪英は可哀想。(札幌 笹舟あき子)(1941年3月号)

⑤「花の命」「愛すべき哉」(芹沢光治良著：引用者注)今月で終わりですね。長い間、佳いお作を本当に有難うございました。「花の命」のあの歌は一生忘れられないでせう。先生(内山基を指す：引用者注)、又お願ひして下さいねきつと。(福岡 美川昌子)(1941年10月号)

①②の感想から分かるように、【戦中版】は連載当初から好意的に受け取られ、話の内容も文章の書き方も読者である少女たちの気に入るものとなっていたようだ。その程度は、時には③にあるように試験勉強を中断してまで続きが気になる読者もいたほどだ。また作者の火野が日中戦争に従軍していた人物であり、その時の経験に基づく小説という認識のもと読まれていた。さらに④の「雪英は可哀想」という感想から伺えるように、読者は中国人を単なる敵として認識していたのではない。この点は、小説の形式、すなわち中国人少女「李雪英(雪子)」について同年代の日本人少女「雪子」に手紙で語るというものも影響しているだろう。読者の少女たちにとって、「雪英」は感情移入できる一人の少女となっていたのだ。本作品は先述した「指示要綱」にあったように、中国や中国人に対して敵対心を抱かせるのではなく、「日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スル」²³ことに加担できる小説となっていた。

【戦中版】の連載終了後には、⑤のように終わりを惜しむような投稿がなされる。火野にと

って『少女の友』への小説掲載は、本作品が初めてであるが、結果として読者の少女たちから非常に好意的に受け取られ、次回作の掲載も望まれるような状況となった。読者投稿は最終的に何を掲載するかしないかの選択を編集者側が行なっているため、作品に否定的なものは掲載されなかったことには留意しなければならないだろう。だが【戦中版】は、時局の要請に沿いながら、『少女の友』の世界観を守ることに成功した作品であったと言える。

さらに「1. はじめに」で述べたように、この作品は連載終了後単行本化され、その後少なくとも一度は再版されているのだ。最終的にその読者層は、『少女の友』を読んでいない子どもたちにも広がったであろう²⁴。

4. 【戦後版】『花のいのち』の書き換え

【戦中版】の単行本は、『少女の友』を刊行していた実業之日本社から出版されたが、書き換えを施された【戦後版】は、単行本として1949年5月にポプラ社から出版される。ポプラ社は戦後1947年6月に児童書専門の出版社として創業しており、【戦後版】はポプラ社にとって初期の作品になる。実業之日本社から出された小説がどのような経緯を経て、戦後、ポプラ社という新規の出版社から再び刊行されるに至ったのかは不明であるが、ポプラ社の編集者と思われる人物が火野に宛てた封書が現存している。

少女小説書いて下さい。とにかく書きはじめて下さい。半分でも三分の一でもいゝから。暴力の港のときのあの筆勢でいけば、はじめてさへいたゞけば、忽ち出来あがるといふ計算になりますから。しかしやっぱり少女ものだからといつて、調子をおろさないで、大いに野心なるものを。かつてなことをいふやうですが、このごろの少女小説ときたら、まったく千^(マ)変一律で、低調を極めておりますから。²⁵

この少女小説の執筆を催促する封書は、【戦後版】の出版からわずか1ヶ月後に、火野のもとに届けられた。「とにかく書きはじめ」ることを強調するこの内容から、ポプラ社としてはぜひともまた火野の書く作品が欲しいという、並^(並)ならぬ熱意が感じられる。その上ただ作品が欲しいというだけではなく、火野であれば「千^(マ)変一律で、低調を極めて」いる昨今の少女小説に、新しい風をもたらしてくれるような「野心なるもの」を書いてくれるだろうという期待も込められているのだ。

管見の限りその後ポプラ社から火野の作品が出版されることはなかったようだが、ポプラ社が火野に対して少女小説を書いてくれるよう望んでいたことは確かだ。戦後、児童書の専門出版社として新たに創業し、火野であれば現状を打開するような少女小説を書けるだろうと期待したポプラ社にとって、戦時中に書いた作品に書き換えを施して生まれた【戦後版】はどのような作品だったのだろうか。以下、【戦中版】との書き換えを見ていく。

【戦後版】に見られる書き換え箇所は作品全体にわたる。そのため本論では全てを引用することはできないが、まず記述面に見られる書き換えを「1. 日本（軍）は「清廉潔白」な「正しい」存在であるとするこの否定」「2. 単語の変化」「3. 中国兵の横暴な振る舞いの削除」「4. 「大東亜共栄圏」建設、「暴支膺懲」という戦争目的の削除」という4つに分けて見ていく。なお【戦中版】は雑誌『少女の友』から、【戦後版】はポプラ社から出版された単行本から引用した。断りが無い限り下線部及び太字の箇所は引用者によるものである。

まず1つ目の日本及び日本軍の描かれ方の変化として、以下のような書き換えがある。

【戦中版】前線の兵隊さんへ出した慰問品が商品となつて売買されるといふことがあるだらうか。日本では考へられないことだ。しかも、泥坊市へ出るといふのはどういふわけだらう。(1940年12月号、p.52)

【戦後版】前線の兵隊へ出した慰問品が、商品となつて売買されるということがあるだらうか。しかし、まったく考えられないことでもない。どんなときにだつて、悪事を働く者は絶えないのだ。悲しいかな、日本にだつてその例はたくさんある。皆が心をあわせなくてはならぬときに、自己一個の利得をむさぼる不徳漢のいることを、ぼくらは認めなくてはならぬ。(p.28)

これは語り手「ぼく」と雪英がどろぼう市を歩いている時、雪英が慰問品として作ったシャツが商品として出品されていることを見つけた場面である。「泥坊市」についても「ならべられてある品物は皆がらくた」で「それが皆贓品ばかり」²⁶だと説明される。「泥坊市」の説明がされるのは、中国独自のものという点を強調し、倫理的な発展の遅れを指摘することにもつながる。また「泥坊」という名の通りいい加減さを表すのが、慰問品であるシャツが兵隊に届けられず、商品として売買されているというエピソードだ。

【戦中版】では、「日本では考へられないことだ」と驚きと憤りを顕にしているが、【戦後版】では「まったく考えられないことでもない」と正反対のことが述べられる。【戦後版】では中国だけが倫理的に劣っているのではなく、日本も同じなのだとする。このことを「ぼくらは認めなくてはならぬ」のだが、ここでいう「ぼくら」は作中の語り手「ぼく」、そして「ぼく」からの手紙を読んでいる「雪子」だけではなく、この小説を読んでいる日本の少女全体への呼びかけにもなっているのだ。このように戦時中の清廉潔白で正しい存在であったとする日本(軍)は否定される書き換えとなっている。

次に2つ目の変化である単語、特に「支那」という単語の書き換えを見ていく。

【戦中版】彼女の通つてみた女学校には支那軍が入りこんで来て、兵舎になつてしまつた。／きちんと整頓された机は部屋の隅に寄せられて積み上げられ、教室には藁が敷かれて、支那兵がごろごろと寝ころがつてみた。支那兵は泥靴でどこどこ上がりこんだ。(1940年12月号、p.45)

【戦後版】彼女の通つていた女学校には、味方の軍隊が入りこんできて、兵舎になつてしまつたからだ。／きちんと整頓された机は部屋のすみに寄せて積み上げられ、教室には藁がしかれて、兵隊がごろごろと寝ころがつていた。中国兵は泥靴でどこどこ上がりこんだ。(p.16)

「支那」という言葉の使用禁止は、第二次世界大戦後中国が戦勝国として東京へ向かい1946年6月に外務省に対して「支那」という呼称を使うことを禁じるよう通達したことに始まる²⁷。その後総務局長岡崎勝男(後の外務大臣)が主要新聞社や出版社に、文部次官が各大学や専門学校に公式公文を配布した。そのため1949年に出版された【戦後版】では「支那」という言葉

は書き変えが行われている。

特にここで着目したいことは、「支那」を「中国」というように機械的に単語が置きかえられているわけではないということだ。引用箇所では、「支那軍」が「味方の軍隊」となっているが他にも「敵軍」という言葉や、「支那姑娘」を「中国少女」「少女」、「支那人」を「人」といったように様々な言葉で書き変えている。【戦後版】では物語全体の流れに気をつけながら、不自然ではない単語の変化が試みられている。

3つ目に中国兵の横暴な振る舞いの削除の例として以下の引用を挙げる。

【戦中版】その多くの支那兵たちの中に、先生が苛められてゐるのが見えたといふことを。その、呉先生だったのだ。／あれから、呉先生は、支那兵にこきつかはれながら、悲しい目を送つてゐるうちに、日本軍が攻めよせて来たので、支那兵は逃げてしまつた。そこで、呉先生はやつと脱れることができた。（1941年2月号、p.206）

【戦後版】その多くの中国兵たちの中にいたということ。その、呉先生だったのだ。／あれから、しばらく、呉先生は、中国兵とともにいたのだが、日本軍が攻めよせてきたので、中国兵は兵舎になつていた、学校を放棄した。そこで、呉先生はとり残された。（pp.65-66）

この「呉先生」は雪英の女学校の先生であり中国兵と一緒にいたが、そこから逃げ出して宣撫班にやってくる。【戦中版】では、「支那兵」から「苛められ」「こきつかわれ」ていたとなっているが、【戦後版】では単に中国兵とともにいたという描写になる。そして宣撫班へ来た事情も、【戦中版】では横暴な「支那兵」から「やつと脱れることができた」となるが、【戦後版】では日本軍の登場で中国兵が逃げ出し、呉先生は一人「とり残された」というように細かな設定が変わっている。こうした書き変えは物語全体の進行には大きな影響がないが、読者が受けとる中国兵のイメージは、【戦中版】【戦後版】で異なることになるだろう。

最後に「大東亜共栄圏」建設や「暴支膺懲」という戦争目的が削除されている箇所として、以下の引用を挙げる。

【戦中版】無論、今度の戦争は支那を叩き潰すのが目的ではない。暴戾な支那軍は徹底的に膺懲するが、無辜な民衆はこれを救ひ、今まで不幸であつた支那の民衆に幸福をとり返してやることが日本の大きな使命なのだ。そこで支那人が帰つて来て業に就き、生活を始めることを僕等は望み、またさういふ風に取りはからつたのだが、（1941年1月号、p.76）

【戦後版】平和と幸福とがかえつて来たように見えた。中国人とは友だちと信じているぼく達は、早く中国人が帰つてきて業につき、生活を始めることを望み、努力をかたむけてそういうふうに取りはからつた。（p.43）

これは広東の街の復興の様子を描いた場面である。どちらも日本が侵略したことで街やそこに住む人々の生活が破壊されたことには触れないが、中国の人々が暮らしを取り戻すことを喜ばしいものとしている。ただし【戦中版】では、「暴戾な支那軍は徹底的に膺懲」し、「無辜な民衆はこれを救」うのだというように日中戦争の意義が強調されているが、【戦後版】ではその

ような戦争の目的は徹底的に削除される。日本側の侵略行為には言及せずに「中国人とは友だちと信じているぼく達」と書くことは、今日的な観点から見れば非常に都合の良い描き方だと批判せざるを得ないが、日中戦争の必要性を訴えかけるようなプロパガンダ的な役目からは退くことになる。

以上大きく4つに分けた書き変えというのは、当時のプレスコードが影響している。横手一彦は掲載禁止・削除理由の類型を31挙げているが、その中には「中国批判 (Criticism of China)」「軍国主義宣伝 (Militaristic Propaganda)」「大東亜 (共栄圏) 宣伝 (Greater East Asia Propaganda)」などが含まれる²⁸。また実際に検閲を受けた児童出版物は、「アジアでの日本軍行為の美化」や「軍国主義的」「大東亜共栄圏宣伝」といった処分理由を受けているものもある²⁹。児童向けのものであっても検閲のあり方は一般の出版物と変わりなく、書き変えにおいてこのようなプレスコードは十分意識されていたであろう。

また出版社側の事情も考えられる。ポプラ社は【戦後版】を出版する9ヶ月前の1948年8月に、南洋一郎『髑髏仮面』が検閲を受け「不許可」という処分を受ける³⁰。この作品は「合衆国批判」が処分理由となっているが、出版社側としては何度も検閲処分を受ける事態は避けなかったはずだ。日中戦争を舞台とした『花のいのち』が、再び検閲処分対象とならないよう出版社側の働きかけもあっただろう。その結果事後検閲を受けた【戦後版】は、検閲処分対象となることはなく全文出版することができた。

このように、日中戦争を舞台とし、戦時中に書かれた少女小説「花の命」を大まかなストーリーを変えずに戦後再出版するに当たって、GHQのプレスコードや検閲の影響は考慮せざるをえなかった。しかし、【戦後版】では明らかにプレスコードを意識したもの以外の書き変えとして、物語設定の変化がある。なぜストーリーを変えずに、物語設定を変えたのか。またその書き変えがもたらす意味は何であったのか。次に、この物語設定について考察する。

5. 【戦後版】『花のいのち』の物語設定から見えてくるもの

【戦中版】【戦後版】共に物語の時代設定はそれぞれの当時、すなわち【戦中版】では1940年頃、【戦後版】では敗戦後の1949年となっている。そして【戦中版】では、語り手「私」が中国に駐留した際、交流した中国人少女李雪英のことを日本にいる少女雪子に手紙で伝えるというものである。この時「私」はすでに除隊し帰還して日本にいるが、代わりに雪子の兄は中国で従軍している。

これが【戦後版】では語り手「ぼく（さらにヒノという名前を与えられる）」と同時期に「牧」という戦友が中国で従軍し、現地の中国人少女李雪英と交流したという戦時中の思い出を、「牧」の妹「雪子」に「ぼく」が振り返りながら伝えるという設定に変わる。また物語世界は敗戦後になっており、一緒に従軍していた「牧」は戦死したということになっている。この【戦後版】の書き変えで特に注目したいのが、「牧」の雪英への態度が妹「雪子」に対するようであったとしながらも、妹に対する以上の恋心も描かれることと、雪英の兄李東伊の人物造形のあり方だ。

【戦後版】で新たに加えられた「牧」の設定に関して先行研究では、「作者である火野葦平自身が戦争と自分とのかかわりを見つめなおすための設定とは、正反対の文学的設定にほかならなかったのである。「ぼく」であるヒノは、安全な傍観者の位置から、親友の「愛」をロマンティックに報告し、戦争のすべての意味を「美しく清い愛」に還元していれば、ことがすんだのだ。この安易な設定が、かれの基本的な戦争像、殺戮のためではなく平和のための戦争という理想像を、その実質を問うことなく生き延びさせたのである」³¹と述べている。すなわち「牧」

の設定は、作者である火野が自身と戦争との関わりを見つめ直すことを回避することにつながり、【戦後版】でも理想の戦争像を保持し続けているとして批判しているのだ。

しかし、本論ではこの書き換えを作家ではなく、外部の要因とくに作品を取り巻く権力の働きから考察する。なぜなら、【戦中版】【戦後版】それぞれが出された社会状況は大きく異なっているが、【戦中版】では帝国日本の中国侵略に関する表現の規制、【戦後版】ではGHQの支配のもと書かれ、受け入れられていったのだ。どちらも権力による言論への制限があるなかで書かれており、物語設定の変化はそれぞれの時代の要請に従うことで生じる。まずはこの作品が読者に伝えようとする「美しさ」について見ていく。以下は日本人少女雪子へ語りかける手紙の引用である。

【戦中版】僕は、それを、決して、少女らしい感傷などといつて笑ひはしない。僕はよその国の知らない娘のことを、君に話してゐるとは思はない。僕は君が、この立派な中国の少女である李雪英に示す共感こそ、大仰にいへば、日本の少女の美しさであるとともに、日本と支那とをつなぐ、美しい一本の川であるとも信じるのだ。今は、ごたごたといさかひを起こしてゐる二つの国が、やがて、手をとりあつて、新しい建設の道にすすむとき、どのやうな混乱にも汚されず、滾々と底を貫きながれてゐる、この美しい川こそが、真の結実をするにちがないのだ。／雪ちやん－／支那の雪ちやんは、可哀さうな運命の少女だつた。しかし、その支那の雪ちやんの精神が、また、立派に、日本の雪ちやんの心の中にも生きてゐることを、僕はかたく信じてゐる。（1941年6月号、p.177）

【戦後版】中国の雪ちやんは、かわいさうな運命の少女だつた。しかし、その中国の雪ちやんの精神が、また、りつぱに、日本の雪ちやんの心の中にも生きてゐることを、ぼくはかたく信じてゐる。／雪ちやん。／こんなことはぼくがここでいうだけやぼなことだね。それはじつに君の兄さんが、兄さんじしんの尊い血であがなつたたからものなのだ。君の兄さんは、一中国の少女のために死んだ。しかしその尊いところは、君の心のなかに、いや人類のなかに美しく清く生きて行くのだ。（p.158）

【戦中版】では「中国の少女」に対して「日本の少女」が共感することを「美しさ」とするが、【戦後版】の「美しさ」は「中国の少女」と「日本の兵隊（牧）」の両者の持つ同じ「尊い心」が取り上げられ、さらにそれは人類全体へと広がるものとして描かれる。ただし、下線部の箇所のように【戦後版】でも中国の少女すなわち「中国の雪ちゃんの精神」が、「日本の雪ちゃんの心」と通じ合っているという点は変わらない。このように【戦中版】では中国の少女対日本の少女といった同じ身分の者同士を持ち出していたが、【戦後版】では中国の少女対日本の兵隊といったように国だけでなく身分をも越えることが描かれる。その上で「牧」が雪英に対して抱く愛情が、妹に対するもの以上の恋心となることは、その身分や立場ですら超えることのできる美しさをより強調させる働きをするのだ。「牧」の設定は兵隊であった兄や父といった身近な存在を失った少女たちが感情移入しやすい物語となるだけでなく、こうした全人類的「美しさ」を表すことで戦争賛美を避けることにもつながるのだ。

もう一点、国や身分をも越えることのできる存在として、書き換えが行われているのが雪英の兄李東伊の人物造形だ。戦争の混乱のなか雪英は両親や兄と離れ離れになってしまうが、そ

の後兄とは偶然再会することができる。しかし、宣撫班に入って日本のために働く雪英と、便衣隊となって暴動計画を企てている李東伊は、お互い相容れない関係になってしまう。以下は、二人が再会する場面である。

【戦中版】久しぶりで邂逅した兄妹は喜びにうたれたが、俊厳な兄はすぐに自分の妹を仕事に利用しようとした。つまり、幸ひ、妹が日本軍の中にゐるので、日本軍の情報を自分の方にもたらせ、といふのである。(1941年1月号、pp. 81-82)

【戦後版】久しぶりで邂逅した兄妹は、喜びでだきあつたが、俊厳な兄はすぐに自分の妹を仕事に利用しようとした。李東伊は熱烈な愛国者だつた。祖国中国のために、一身を挺し、一命をささげて悔いぬ男なのだつた。自分の任務の困難さを思えば、自分の妹が日本軍のなかにいることをどうして活用せずにおられよう。(p. 53)

李東伊が便衣隊の暴動計画を遂行するために、雪英を利用して日本軍の情報を手に入れようとする点は【戦中版】【戦後版】ともに変わらないが、【戦後版】では「熱烈な愛国者」として、立場は違うが李東伊もまた国のためにその身を捧げているのだという説明がされる。【戦中版】では、この作品内で唯一の悪役として明確な立場を与えられる李東伊だが、【戦後版】では単純に悪役として見ることのできない描き方がされる。

【戦中版】雪英の兄が、ばかだとは考へられぬ。頭のよい賢い男であることは、雪子の話からでもよくわかる。(1941年4月号、p. 191)

【戦後版】雪英の兄が、バカだとは考えられぬ。バカどころか、愛国の情熱にもえる、勇氣に富む若者だ。頭のよいかしこい男であることは、雪子の話からでもよくわかる。(p. 107)

【戦中版】では李東伊を「ばかだとは考えられぬ。頭のよい賢い男」となっているように、敵である中国人の彼は必ずしも憎むべき敵や侮辱するべき人物として描かれているわけではない。これは当時の児童読物に対する「指示要綱」の要請とも一致する。しかし【戦後版】ではそれだけにとどまらず、「バカどころか、愛国の情熱にもえる、勇氣に富む若者だ」と付け加えられる。この説明から、語り手の「私」が彼を敵として見てはおらず、寧ろ一目置く存在としていたことがわかる。他にも【戦中版】では李東伊に対して「狡く」³²という言葉を使っていた箇所が、【戦後版】では「考え深く」³³という言葉に変わるなど、非常に細かいところまで、読者に与える彼のイメージを変えようとしているのだ。

【戦後版】における李東伊の人物造形に着目すると、日本に協力する中国民衆は味方であり、齒向かうような思想を持つ人物は敵であるという、戦時中の中国人の描き方からは解放されている。中国民衆のために戦っているという点では、宣撫班にいる日本兵や雪英と、便衣隊の李東伊は同じである。【戦後版】では李東伊を明確に悪役としての役割を持つ人物とはしないが、そのような人物であっても敵味方に分かれてしまったことを描くことで、読者である日本の少女たちに戦争の悲惨さを伝える役目を担っているのだ。ただし、そこでなぜ仲の良かった兄妹が、同じ中国という国の人々同士が、敵味方に分かれるようになったのかという背景までは描かれていないことに留意しなければならない。

すなわち作品の舞台となっている日中戦争に日本側がどのように関わっていたのかという点に触れるのではなく、李東伊のような敵であるはずの人物も共感を寄せることができる人物として描くことで、【戦後版】は兄妹の対立の物悲しさを強調する方向へと書き変えられている。この変更によって戦争の悲惨さを伝え、【戦後版】を反戦的、厭戦的な物語とすることができる。ただし、兄妹が敵味方に別れなければならなかった背景にある日中戦争における日本側の関わりは、読者である日本の少女たちに伝わらないだろう。【戦後版】が伝える戦争の悲しみは、日本軍という立場から日中戦争に向き合って描くことを避ける形で生じている。

以上を踏まえて【戦後版】で、中国人少女雪英に「平和」を語らせることについて考えてみたい。

【戦中版】そんな軍閥が、自分たちの利益のために、日本とこんな戦争をおつぱじめて、民衆を塗炭の苦しみに落した。兄さんだつて、その軍閥について廻つて、あたしは悲しいわ。あたしはほんたうに祖国を思へばこそ、今は、日本軍についてゐるの。あたしが何も日本人になつたり、日本軍の手先になつたりしてゐるのぢやないのよ。（1941年3月号、p. 53）

【戦後版】戦争のおかげで、民衆は塗炭の苦しみに落された。あたしは日本に味方するわけぢやないの。あたしはほんとうの平和のことで、胸が一ぱいだけです。あたしは心から祖国を思えばこそ、今は、日本軍についてゐるの。でも、詭弁でもないわ。あたしが何も日本人になつたり、日本軍の手先になつたりしているのぢやないのよ。（p. 81）

雪英が中国民衆が平和に暮らせるために自分の命を捧げようとする点は、【戦中版】【戦後版】ともに共通している。一方そのように中国民衆を苦しめている原因については、【戦中版】では中国の「軍閥」を具体的に挙げているが、【戦後版】では「戦争」という曖昧な表現になっている。【戦後版】で「軍閥」という言葉を使わなかったことは、無論プレスコードを意識し、中国批判を避けようとしたはたらきがあるだろう。

しかし【戦後版】においても戦争の原因は明らかにされないまま、国を超える「平和」の追求を中国人少女に語らせている。その上本作品は中国人少女雪英を中心とする戦時下の出来事を、日本にいる雪子に語りかける形式で進んでいく。このような形式を取ることで読者の日本人少女たちも、まるで自分たちに語られているかのように読むことができただろう。しかし中国人少女の立場で語られる美しい平和は、日本側にとってこうであってほしいという都合の良い戦争観であることは否定できない。そのため雪英の運命に心を痛めながらもその平和を願う思いのみを素直に受け止めたとしたら、宣撫班に従事していた中国の人々の複雑な感情は見えなくなってしまうのではないだろうか。

その点に作者である火野がどこまで自覚的であったかは分からないが、【戦後版】には【戦中版】にない「まえがき」が付け加えられ、以下のように読者に呼びかける。

戦争は人間の最大の不幸である。絶対に避けねばならぬ。しかし、その私たちの平和への希求をふみにじつておこつた戦争のなかで、どんなに、人間が苦しみ、悲しんだか、それ

を見つめることも、たいせつなことだ。(p. 3)

火野は【戦後版】において、「人間の最大の不幸である」戦争によって「どんなに、人間が苦しみ、悲しんだか」を戦後社会を担っていく少女たちに伝えようとした。「1. はじめに」で述べたように読者の少女たちもまた、【戦中版】を意識せずに【戦後版】を読んだのであれば、日本側にとって都合の良い戦争観の再生産に気づくことなく、単に平和の必要性を訴えかける作品として受け入れることができたであろう。書き換えにより、火野の「まえがき」にあるような思いは、次世代へと投げかけることに成功したのだ。

6. おわりに

以上敗戦を経て戦後再び出版された、日中戦争を舞台とする「花の命」／『花のいのち』の書き換えを見てきた。【戦後版】の執筆当時、公職追放指定を受けていた火野が、戦争を描いた作品を再び日本の少女たちに届けようとしたことから、この作品に対する思いはよほど大きかったのだろう。またこの少女小説が置かれた作品の外の世界を見ることで、作者火野葦平の思いだけでなく、それを受け入れていった社会状況を明らかにすることが可能となる。

【戦中版】は、少女向け雑誌『少女の友』に連載された火野作品としては初めてのものである。当時戦時色が強まる社会の中で、児童向け書物もどのようなものを子どもに伝えるかという細かい指示が出されるようになっていく。そしてそれは、華やかさやロマンチックさを売りとする『少女の友』とは相反する指示でもあり、『少女の友』の世界観が失われていくことに対して、失望していった読者の少女たちも少なくはなかった。このような時期に【戦中版】は掲載されたのである。

明るく賢明な中国人少女雪英を主人公とするこの作品は、読者の日本人少女たちが共感できる物語でありながら、国からの要請である、子どもたちに中国への関心を持たせ「日支ノ提携ヲ積極的ニ強調スル」目的を十分に果たすこととなる。本作品が中国侵略をアジアのための必要性や、美しさへとすり替える役割を果たしたことは否めないが、だからこそ戦時下の統制が強まる社会状況の中で、雑誌連載、単行本化といった形で読者に届き得たのである。

そのような作品であったために、【戦後版】の再出版では、敗戦後という新たな時代状況を意識せざるを得なかった。すなわち日本を取り巻く連合軍の「権力」、GHQによる言論統制の存在である。【戦後版】に見られる書き換えは、第一にプレスコードを回避するように行われているのだが、それだけにとどまらない箇所も見られる。

本論で注目したのは、「牧」という登場人物が抱く、中国人少女雪英への妹に対する情愛などとは異なる愛情の描写や、悪役でありながら理解できる存在として描かれる李東伊の人物造形だ。このような新たな設定は日中戦争を舞台とする物語を、戦争賛美と受け取られないようにする働きを強める。しかしその一方で、雪英と李東伊がなぜ敵味方に分かれなければならないのかということとは描かれず、【戦後版】では中国／日本といったカテゴリーにとらわれない「ほんとうの平和」を中国人少女に語らせるのだ。

これらを踏まえると、【戦後版】は一見「中国批判」や「大東亜（共栄圏）宣伝」といったプレスコードを避け、戦争賛美につながらないように書き換えられているが、そのような書き換えはむしろ戦争の解釈を日本側にとって都合の良いものにしてしまうことにつながる。なぜなら書き換えによって、日本側が戦時中の自らの行為を反省するという視点で見つめ直すことにはなっていないからだ。ただしこの点は作者火野も、作品を受容していった戦後社会も自覚で

きなかったのではないだろうか。日本が中国に対する戦時中の行為を自戒する流れにならなかった要因の一つに、日本がアジアにおける冷戦の中で西側陣営に組み入れられていった点が挙げられるが、【戦後版】はこの冷戦構造のもと「許可」される作品となっていたのだ。

敗戦直後の日本人のアジア認識が示された資料として、1945年12月、北京にいる日本の民間人・軍人385名を対象に行った調査がある。調査側がアメリカ陸軍情報部将校であることには考慮すべきだが、この結果からはアジアにおける日本の優越意識が見られ、敗戦後も「帝国」意識が保持され続けていると指摘する研究もある³⁴。【戦後版】が、中国への侵略行為に対する反省という形で書き換えられたわけではないことは、敗戦後の日本人のアジア認識を反映しているとも言えるのだ。

そのため【戦後版】で日中戦争を描く時、戦争そのものへの反省や中国に対する罪悪感が表れるのではなく、悲劇の中国人少女雪英の平和を求める美しさのみが強調されることは、戦時中から維持された日本人のアジア認識を再生産することに与する。【戦後版】で命をかけて美しい平和のあり方を追求する役割を果たす雪英の存在は、日本側にとって都合の良い戦争認識が付与された存在とも言える。戦時中日本側につき戦争協力をした中国の人々が抱いていたであろう複雑な思いは、戦後社会を担っていく次世代の読者たちには届いてはいない。【戦後版】は敗戦後の日本社会が抱える、中国をはじめとするアジアの国々への見方が戦時中から変わらないという問題にも結びつくだろう。ただし、作者火野はその後1955年に再び中国を訪れている。火野自身が戦後、かつての戦場である中国に対してどのように認識を変化させたのか、または変化しないのかという点は今後の課題としたい。

日中戦争下で活躍した作家は、敗戦後、戦時中の中国に関する作品を描かなくなる場合が多い。しかしながら、火野は公職追放指定を受けながらも作品を発表した稀有な存在である。今日的な立場から【戦後版】に描かれた日中戦争観を批判することは容易いが、そのような作品が「兵隊作家」と呼ばれる火野によって描かれたこと、また戦後社会において平和を語る物語として受け入れられていったことは、改めて日中戦争をめぐる日本社会の認識を捉える上で重要であると考えられる。

注

¹ 火野葦平『花のいのち』ポプラ社、1949年、「まえがき」p.3。

² 村上寿世・谷暎子編『メリーランド大学図書館所蔵 ゴードン・W・プランゲ文庫児童書目録 占領期検閲児童書目録 1945-1949』UMI、2003年、p.263。

³ 総理府官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』日比谷政経会、1949年、「公職追放事務の経過」pp.1-14及び「公職追放関係法令集」pp.1-5参照。

⁴ 現代法制資料編纂会編『戦後・占領下法令集』図書刊行会、1984年、p.912、指定後異議申し立てが認められ、解除された者を除いた最終追放決定者数は326名。

⁵ 鶴島正男「新編 火野葦平年譜」『敍説』XIII、花書院、1996年8月、p.15。

⁶ 「石川、丹羽、岩田氏ら非該当」『読売新聞』1948年5月15日、2面。

⁷ 「今月中さらに第二次も 文筆家の公職追放仮指定 今後の執筆を制限 小説や学術論文はいゝ」『朝日新聞』1948年3月21日、2面。

⁸ 「SCAPIN-550 联合国総司令部発日本政府宛昭和21年1月4日付覚書 附属書A号」（引用は総理府官房監査課編「公職追放関係法令集」『公職追放に関する覚書該当者名簿』日比谷政経会、1949年、p.5による。）

⁹ 樋口大祐「第8章 出合い損ねた「他者」—火野葦平『花の命』における中国人少女の「記

憶」について」『共生の人文学』神戸大学、2008年。

¹⁰ 池田浩士『火野葦平論』インパクト出版会、2000年、p.503。

¹¹ 実業之日本社編『『少女の友』創刊100周年記念号 明治・大正・昭和ベストセレクション』実業之日本社、2009年、p.4。

¹² 内田静江編集『昭和初期の少女雑誌『少女の友』展—内山基と中原淳一、戦前少女文化の華』弥生美術館、1999年、p.24。

¹³ 11に同じ、p.6。

¹⁴ 中原蒼二「父・中原淳一と『少女の友』」11に同じ、p.17。

¹⁵ 遠藤寛子「一瞬のきらめき 『少女の友』の内山時代」11に同じ、p.325

¹⁶ 11に同じ、p.6。

¹⁷ 火野葦平「解説」『火野葦平選集 第2巻』東京創元社、1958年、p.406。

¹⁸ 「児童読物改善ニ関スル指示要綱」鳥越信編『はじめて学ぶ日本の絵本史Ⅱ—15年戦争下の絵本』ミネルヴァ書房、2002年、p.357。

¹⁹ 12に同じ、『少女の友』略年譜、p.33。

²⁰ 14に同じ、p.14。

²¹ 遠藤寛子「第2章 中原淳一氏のこと」『『少女の友』とその時代—編集者の勇気 内山基』本の泉社、2004年、p.38。

²² 12に同じ、『少女の友』略年譜、p.33。

²³ 18に同じ。

²⁴ 波佐間義之「火野葦平—「花の命」に魅せられて」(『あしへい』第12号、2009年12月)では、波佐間氏の姉が図書館から借りてきた単行本の『花の命』を自身も読んだと述べている。

²⁵ 封書(HA2-09848、1949年6月11日(作成年については執筆者の推定による)、北九州市立文学館所蔵。差出人である編集者の方のお名前は、著作権の関係で伏せて使用する。

封筒およびには便箋には「6月11日」という日付が書かれているが、作成年についての記述はない。ただし、便箋に「暴力の港の、素晴らしい広告今朝電車の窓から見ました」という記述がある。「暴力の港」は火野の書いた小説で、『サロン』(4巻6号、1949年7月)に掲載された。差出人の見た広告とはこの『サロン』のことを指すと考えられる。また封筒に貼られた切手のうち「中央气象台創立七十五年」と書かれたものは1949年6月1日に発行された。以上からこの封書は1949年6月11日に書かれたものと思われる。

²⁶ 『少女の友』1940年12月号、p.50

²⁷ 伊藤一彦「中国と「支那」」『中国研究月報』565号、1995年3月参照。

²⁸ 横手一彦『被占領下の文学に関する基礎的研究 論考編』武蔵野書房、1996年、pp.28-30。

²⁹ 一例として「アジアでの日本軍の行為の美化」とされた塚本長蔵『小使さんの日記*切抜き』(新日本文化協会、1946年)、「軍国主義的」とされた池田宣信『クオレ物語』(大日本雄弁会講談社、1947年)、「大東亜共栄圏宣伝」とされた伊藤松雄『十五少年漂流記』(一陽社、1947年)などがある。(谷暎子『占領下の児童出版物とGHQの検閲—ゴードン W. プランゲ文庫に探る』共同文化社、2016年、pp.27-34参照。)

³⁰ 谷暎子『占領下の児童出版物とGHQの検閲—ゴードン W. プランゲ文庫に探る』共同文化社、2016年、p.30。

³¹ 池田浩士『火野葦平論』インパクト出版会、2000年、p.506。

³² 『少女の友』1941年4月号、p.189。

³³ 『花のいのち』p.101。

³⁴ 一例として吉見義明『草の根のファシズム』東京大学出版会、1987年、pp.273-276。